



JAPANESE LANGUAGE EDUCATION METHODS

第31回 日本語教育方法研究会
愛媛大学
2008年9月20日(土)

会長 才田いずみ

今回は愛媛大学のご厚意により研究会を開催する運びとなりました。是非とも多数の方々にご参加いただけますよう、ご案内申し上げます。

TABLE 1 第31回研究会開催について

日時 :	2008年9月20日(土)
会場 :	愛媛大学 総合情報メディアセンターメディアホール
開催委員 :	向井留美子(愛媛大学) 名嶋義直(事務局, 東北大学)

TABLE 2 開催スケジュール

午前		午後	
9:00	発表者受付 ポスター貼付	1:40	講演
9:30	一般受付	2:10	口頭発表開始
10:00	開会の挨拶	3:10	ポスターセッション開始
10:05	会の進め方の説明	4:40	講評
10:10	口頭発表開始	4:50	次回開催委員挨拶
11:10	ポスターセッション開始	4:55	閉会の挨拶
12:40	昼食・休憩	5:00	参加者全員で後片づけ
		5:30	懇親会

【参加方法】

事前申し込みは必要ありません。直接会場にいらしてください。非会員の方でも会場での入会手続きをして参加することができます。お誘い合わせの上、ご参加ください。

【プログラム】

【午前の部】

●口頭発表（5件）

1. 初級日本語学習者の教室外活動を支援するための教室内指導-電話による問い合わせ・依頼の場面を中心に-
澤 恩嬉・後藤典子（山形短期大学）・渡辺文生（山形大学）・山上龍子（山形短期大学）

本発表は、初級日本語学習者の教室外活動を支援するための教室内指導に関する実践報告と考察を行うことを目的とする。学習者が電話でカタログを注文したり、旅行のための問い合わせをするというプロジェクトワークの課題から得られた会話データをもとに、教室内事前指導の効果と新たなコミュニケーション上の問題点を明らかにする。

2. 会話スクリプトに見られる終助詞「よ」「ね」の分析-フランス人初級後半日本語学習者の事例を中心に-
寺尾 梓（筑波大学大学院生）

本研究は、フランスで学ぶフランス人初級後半日本語学習者（JFL）を対象に、親しい友人間の会話における終助詞の使用状況と誤用のパターンを分析するものである。学習歴 200 時間の学習者と 300 時間の学習者が作成した会話スクリプトの分析により、学習時間が増加しても終助詞の使用が大幅に増えることはないことがわかった。また、JFL の作成した会話スクリプトを日本語母語話者（JNS）に訂正させた結果、JNS は終助詞のない発話文を最も多く訂正した。JNS が終助詞のない発話文の文末に最も多く付け加えたのは「よ」であった。なお、「よ」に次いで「んだ」「ね」を付け加える事例も多くみられた。JFL の友人間の会話スクリプトが JNS に違和感をもたらす第一の要因が「よ」の不使用にあることから、「よ」の指導に留意する必要があることがわかった。

3. 会話能力育成のための会話分析・会話練習・ビデオ作品作成を融合した授業の可能性-教師と学習者による
研究と実践の連携-

中井陽子（国際教養大学）

学習者が会話能力を向上させていくためには、実際の口頭運用練習だけでなく、自己や他者の会話を客観的に分析していく能力も必要である。本発表では、学習者による会話の分析活動と、それに基づいた会話練習と、それらの集大成としてのビデオ作品作成プロジェクトの実践の可能性を分析する。そこから、学習者が如何に自己で学びとった会話の特徴を自己のビデオ作品に取り入れ、またそれを振り返っているかというプロセスを明らかにする。このように、教師が会話分析した成果を授業活動のデザインに活かし、それを学習者も会話分析し、ビデオ作品作成につなげるような、研究と実践の連携を図った教室活動の有効性について述べる。

4. 視覚的マップを用いたピア活動の試み-文章表現クラスの学習者の気づきを中心に-

内丸裕佳子（早稲田大学）・木原郁子（早稲田大学大学院生）

本発表は上級前半の日本語学習者を対象とした文章表現クラスの実践報告である。学習者は文章を構成するために視覚的マップを描き、それに基づいてピア活動を行った。視覚的マップ（マインドマップ）の特徴は、色や絵を用いることにより言葉だけでは表現しきれない内容を描く点にある。ピア活動にマインドマップを取り入れることで学習者にどのような刺激を与えたのか学習者の内省記録をもとに分類・分析すると、アイデアが豊かになる、整理がしやすくなる、文章全体のコンセプトがつかみやすくなる、各項目のつながりに気づきやすくなるといった特徴が挙げられる。これは学習者自身がマインドマップを作成する時にも、ピア活動でマインドマップを交換してフィードバックを得る時にもいえることである。マインドマップには外国語で文章を書くことに対する学習者の負担を軽くする作用があることもわかった。

5. J-support と構築する中級日本語口頭表現クラス

田中喜美代（愛媛大学）

初級段階に於いて習得した言語的能力に加えて、コミュニケーション能力、文化的能力を引き上げ、日本社会の枠組みの中でその構成員と同じように振るまえる能力の養成を目標とし、日本語における男女の言葉の差や待遇表現の習得のための実用的な課題達成のための教室活動を展開した。活動は日本人学生の参加を得て、学習者と日本人学生との協働による課題達成を中心とし、学習者同士の相互評価、日本人学生による評価を実施した。

●ポスター発表（上記 5 件を含む 13 件）

6. 学習者表現に対する訂正結果から見る学習者の語彙知識と母語話者の評価態度

曹 紅荃（西安交通大学）・仁科喜久子（東京工業大学）

本稿では共起表現に対する判断テストの訂正結果を、「誤用を正用に直す EC・誤用を誤用に直す EE・正用を異なる正用に直す CC・正用を誤用に直す CE」の 4 種類に分類して分析を行った。テストに出題される表現は自然か不自然かによって(○:自然、×:不自然)JOと J×になる。母語話者 JN は JOの出題に対して訂正が少なく、CC のように好む表現を提示している。学習者 CN は中国語の直訳が自然な JOの出題を十分理解し、訂正も CC になるが、一方、中国語の直訳が不自然な JOの出題には誤った訂正 CE が多数現れ、CN には困難であることが分る。また J×の出題には CN は JN と共通している訂正もあるが、CN の語彙知識が定着しないことが観察できた。EE や CE の訂正から、学習者のモニターの働きや学習困難点を発見し、CC や EC の訂正から学習者の判定自信や好みを観察できた。J×の出題に対して JN の訂正は多種多様で、日本語において典型性の高い表現を提示したり、表現の形式を変えたりする訂正が多い。これによって JN にとって望ましい表現および学習者表現に対する評価態度を検討した。

7. 日本語教育書字指導での筆ペン使用の有効性-タイ人学習者を対象としたパイロット調査から-

林 朝子（三重大学）

タイ人学習者 36 名を対象に、漢字指導の際に筆ペンによる学習を行った。非漢字圏であるタイ人学習者にとって、漢字学習は非常に困難である。その原因として、直線的であり、構築的であるという漢字の特徴と基本点画の書き方に関する理解と習得が不十分である点が挙げられる。字画が多い漢字は必然的により構築的な特徴を持つことになり、バランスよく書けないとする学習者が多かったが、「横線を平行に書く」といった基本点画の習得不足による点が多い。しかし、漢字の特徴と基本点画を導入した上での筆ペンによる書字学習を行うことにより、学習者に書字後、自分で書いた漢字を客観的に見る機会を与え、書字に対する意識を強化したといえる。また、正確な書字ができれば、漢字を目で認識しやすくなり、記憶する上でも役立つであろう。筆ペンを漢字指導の初期段階から導入し、更に継続的に指導を続けることで、書字に対する意識化の強化につながるはずである。

8. 無助詞使用状況の一考察-韓国人学習者を対象に-

安 祥希（筑波大学大学院生）

日本語と韓国語は本来助詞が現れる位置に助詞が現れない「無助詞(φ)」と呼ばれるものがともに存在する。しかし、意味・用法の観点から見ると、両言語の無助詞使用範囲は完全に一致するものではない。本稿では、自然さを問うアンケート調査を日本語母語話者(NS)、韓国人日本語学習者(NNS)に行い、その使用状況を概観したものである。その結果、自然な無助詞文と判断される文は両者ともに自然と判断した。だが、不自然と判断される文に対して、NNS は不自然と判断出来ず、自然であると判断した。不自然な文を NNS の母語で訳すと、全て自然な文になることから恐らく母語の流用が 1 つの原因として挙げられる。NNS と NS の使用に差が現れることが証明できた。

9. 渡日前 e ラーニングをともなう日本語短期サマーコース-IARU-GSP における初級レベルのコースデザイン

増田真理子・前原かおる・菊地康人・李 相穆（東京大学）

本発表は、2008年6月に、国際研究型大学連合サマープログラム（IARU-GSP）の一環として東京大学で実施された2週間の短期日本語コース（初級者対象）を紹介するものである。受講者は加盟校から派遣された学部学生で、今年度は7か国9名の学生を迎えて行われた。コースの特徴は、①渡日前にeラーニングで事前学習を課したこと、及び、②単位認定科目としての開講であるため、会話能力を与えるのみならず、日本語という言語の理解（文字体系の知識、動詞活用の仕組み、漢字辞書・日英辞書の検索方法の学習など）についてもバランスよく配置した“教養系サバイバル”日本語を目指したことである。発表では、eラーニングによる渡日前学習の実施方法、コース期間中の具体的なシラバスと学習活動の実際、学生からのフィードバックについてそれぞれ報告する。

10. 新聞の人物欄を用いた発表およびレジュメ作成の試み

田中真寿美（筑波大学）

本稿では、日本の大学で学部留学生が行った、新聞の人物欄を読み、その記事について発表するためにレジュメを作成するという活動の報告をする。学生からのアンケート及び口頭でのコメントから、この活動を評価した。この結果、以下のことがわかった。・ほとんどの学生が他の授業ではレジュメ作成指導を受けた経験がないという結果から、この授業でレジュメ化練習を行う意義がある。・学生がレジュメ化練習を有用であると認識している。・新聞の人物欄を使用した活動は、面白いと評価されていた。・わかりやすい発表をするためには、レジュメ作成過程で情報の取捨選択、内容の再構成を行う必要があるが、学生は人物欄を使用した活動においてそれらを意識していた。人物記事のレジュメ化練習はそれほど難しいととらえられていなかったことから、短くて簡単に読める人物記事でも、発表のためのレジュメ化練習に有効だと言える。

11. より実践的な日本語力養成を目指したビジターセッションの試み

高橋志野・向井留実子（愛媛大学）

経済産業省と文部科学省による「アジア人財資金構想」では、留学生に日本の企業で円滑に働ける能力を養成するため、Project Based Learning（以下PBL）の使用が推奨されている。このPBLを円滑に実施する素地作りとして、愛媛大学ではビジネス日本語教育で行うビジターセッション（以下VS）で、留学生にもVSでの役割を分担しているが、H20年度の実施報告書作成後、①情報明示化による振り返りと気づきの促進と②情報共有による協働作業の推進という成果がみられた。また現時点の問題として、①教室外で使用される口頭日本語の把握と②振り返りのタイミングと個人差の2点が挙げられ、その対応策として①ICレコーダー使用による授業外の口頭日本語データの収集、②授業内でのVSのビデオ録画の振り返り、③教師自身の「留学生に対する振り返りや気づきのサポート方法」の振り返りと気づきの実施を考えている。

12. 文章の難易度判定のための単語親密度チェッカーの開発

川村よし子（東京国際大学）・北村達也（甲南大学）

1999年からインターネット上で公開している「リーディング・チュウ太」では、文章のレベル判定ツールとして、語彙チェッカーと漢字チェッカーを提供している。いずれも日本語能力試験の出題基準をもとにして、文中の単語や漢字の難易度を判定するツールであるが、今回、新たに難易度判定の基準として、『日本語の語彙特性』（天野ほか、1999）の単語親密度を用いた「親密度チェッカー」の開発を行った。親密度チェッカーは、入力された文を『茶釜』（松本ほか2000）によって形態素解析し、各単語の難易度を、単語親密度（文字及び音声の提示）をもとにレベル判定するツールである。文中のすべての語のレベル別リストを作成すると共に、レベル別の単語数をカウントし表示する仕組みも取り入れた。本発表においては、この親密度チェッカーの開発について報告すると共に、親密度チェッカーの運用実験の結果分析とそれをもとにした改良点に関して報告する。

13. ペン入力PCを活用したクラス活動の試み-日本語クラスでのタブレットPCの使用-

橋本 智・大石寧子 (徳島大学)

教育分野で、コンピュータの画面に電子ペンで直接入力するタブレットPCが活用され始めている。画面に書いたものをそのままコンピュータで表示したり、文字認識させてワープロソフトに入力したりすることもできる。タブレットPCには無線LANが搭載されているので、教師と複数の学生のPCをネットワークで結ぶことも可能である。PCをプロジェクターに接続することによって、教師のPCの画面だけでなく個々の学生のPCの画面も自由に投影することができ、教室内で瞬時に情報を共有することができる。日本語クラスの使用例としては、タブレットPCを使って教室内外で作文をして、それを教室で他の学生と共有したり、教師が学生の書いたものに直接コメントを書き入れたりするということが考えられる。タブレットPCの特性を生かして、日本語教育での効果的なツールのひとつとしての活用を検討したい。

【午後の部】

●講演 若造から見た日本語教育

河野俊之氏 (横浜国立大学)

●口頭発表 (5件)

14. 日本語教師の発音指導に対する意識と問題点-アンケート調査結果より-

大久保雅子 (早稲田大学大学院生)

本調査は、日本語学校で働く日本語教師が、発音指導についてどのように考え、どのような問題点を抱えているのかを明らかにしようとするものである。民間日本語学校では、授業の中で発音指導に時間を割くことが非常に難しく、実際の指導は個々の教師に任されている場合が多い。現場の教師の発音指導に対する意識を調査するために、都内日本語学校で働く日本語教師を対象に「発音指導経験」「発音指導頻度」「発音指導の必要性」「発音指導の困難点」などの項目でアンケート調査を実施した。近年、音声研究の成果から韻律特徴が重要な役割を果たしていることが分かってきたが、日本語教師19名のアンケート調査結果から、教師は「単音や特殊拍レベルでの効果的な指導法」を求めており、「発音指導が学習者のモチベーションを下げるのでは」等の発音指導に対する不安を抱えていることが浮き彫りとなった。

15. 日本語教師のアクセント聞き取り能力養成について-成績別、問題の難易度の分析-

築地伸美 (愛媛大学)

日本人日本語教師のアクセント聞き取り能力は、個人差が大きい。効果的なアクセント指導をするためにも、聞き取り能力の養成は不可欠であるが、有効な方法はまだ確立していない。本研究では、聞き取り能力のレベルによる問題の難易度について報告する。まず、アクセントの聞き取りテストを実施し、成績別に3グループに分けた。グループごとにどんな問題に正解でき、どんな問題に正解できないかを分析した。その結果、「高低で始まるもの」は易しく、「低高で始まるもの」から「低低や高高で始まるもの」へと難易度が増す、「高低の変化が大きい、比較的短めのもの」「同じ高さが続く長めのもの」は易しく、上位でも「下がり目が1拍しか違わない選択肢」は難しいことなどが明らかになった。能力別の問題の難易度は、易しいことから難しいことへと段階を踏んだ聞き取り能力養成方法を考えるための手がかりとなるだろう。

16. 論文作成指導におけるフィードバックを中心とした一斉授業での試み-枠組みを言語化するための教材を用いて-

長濱友子・犬飼康弘 ((財)ひろしま国際センター)

本稿は、(財)ひろしま国際センターが実施する留学生対象のコースにおける「論文作成」の授業について、フ

ィードバック中心の授業の流れ、教材、成果を報告するものである。これまで、半年で 2 本の論文の完成を目指し、論文作成→個別指導という授業を進めていたが、練習量やフィードバックの効率という点で課題があった。そこで、論文全体を書く作業の前に、「序論・本論・結び」の各部分を数回ずつ書く練習をすることにし、そのための教材を作成した。教材は、内容や構成を指定し、学習者に言語化させるというものである。この結果、練習の回数が増え、学習者に達成感を与えることができた。また、部分を書く練習の際に論文全体を予測するため、学習者の論文の構成への意識が高まった。さらに、論文作成に必要なスキルが明確になり、フィードバックのポイントを絞ることが容易になったことで、効率的な論文作成の指導を、一斉授業で行うことが可能になった。

17. 中上級レベルの「討論会」における準備活動の効果-アイスブレイキングとプレ討論会-
柳田直美（筑波大学）

討論活動は、中級以上の学習者対象の学習活動として多く取り入れられているが、このような活動は学習者間に自由に意見を言い合える雰囲気があることが前提となる。また、ただの意見の言い合いにならないために、学習者に事前にルールや使用する表現を導入する必要がある。そこで本稿では、中上級学習者対象の集中日本語コースにおける「討論会」の準備活動として行った(1)学習者間の雰囲気作りのためのアイスブレイキングと(2)ルールや表現の意識化を図ったプレ討論会について、その効果を考察した。その結果、アイスブレイキングでは、1対1の自己紹介→相互インタビュー→全体への報告により、クラスで意見を言いやすい雰囲気が作られただけでなく、「相手の話を聞き理解する」「聴衆にわかりやすく話す」という討論活動の基礎を導入することができた。また、プレ討論会によって、討論活動に必要な、相手の意見の尊重、グループ内の協力、討論にふさわしい意見の述べ方の意識化を短時間で図ることができた。

18. 留学生の就職支援プログラムの試み-「アジア人財資金構想」共通カリキュラムのカスタマイズを踏まえて-
大石寧子・石田 愛・遠藤かおり（徳島大学）

徳島大学は、この春より「アジア人財資金構想高度実践留学生事業」に参加し、本コースの共通カリキュラムを元に授業を展開している。しかし従来のクラスとは異なり、本コースは参加学生の日本語能力差をはじめ専門分野や学年の違い等いろいろな問題が存在している。そこで徳島大学では、これらの「違い」を埋めるべく、いくつかのアプローチを試みている。これらを検証したい。

●ポスター発表（上記 5 件を含む 13 件）

19. 韻律指導に対する学習者の内省メールの分析-韓国在住日本語学習者を対象に-
高橋恵利子（韓国建国大学校）・松崎 寛（広島大学）

韓国で日本語を学ぶ大学生 20 人を対象に、アクセント規則を中心とする韻律指導を 3 ヶ月間行い、指導期間中、毎回の授業について内省メールを提出させた。内省メールには、聞き取りと発音、理解と運用、発音学習への興味と負担、自己分析、仮説構築など、学習者各自の様々な反応が記されていた。これらを質的に分析することで、日本語に触れる機会の少ない JFL の発音学習を支援する指導方法について検討する。

20. 中国語話者の聞いて分かる経済用語を増やすための練習を試みた結果報告
岡田美穂（九州共立大学）

文字（漢字）に頼る中国語話者は、経済学部での講義を受けても、文字がなければ講義の内容を理解することが難しい。そこで、経済関係の講義を理解するために欠かせない経済用語が、聞いて分かるようにするための練習を 1 年間実施した。それは、中国語話者が約 30 の経済用語を聞いて漢字で書き取ることにポイントをおいた練習である。本調査は、その練習の効果を調べたもので、調査対象者は、練習を受けた 2 年生 30 人と練習を受けていない 1 年生 30 人である。調査の結果、15 の経済用語が文字（漢字）を見て中国語に翻訳された数は、1 年生も 2 年生も平均 7 割以上だったが、経済用語を聞いただけで中国語に翻訳できた数は 2 年生が 9(60%)、1

年生が 5(33%)で、練習を受けた 2 年生の方が聞いただけで分かる経済用語が多く、練習の効果があったことが分かった。

21. 漢字・語彙学習における「語彙リスト」の役割

小林由子（北海道大学）

本発表は、中上級の漢字・語彙学習における「語彙リスト」の役割を検討することを目的とする。語彙リストは、主に読解教材によく見られ、教材に現れる語彙の読み方、意味、品詞を提供することが多い。おそらく、その役割は、学習者の負担を減らし、学習者の知らない新しい単語に焦点を当てさせることだと考えられるが、語彙リストの役割に焦点を当てた研究は管見ではあまりない。漢字・語彙教材ではあまり語彙リストは用いられていないが、語彙リストは、漢字・語彙学習において、学習者の語彙知識を豊かにする可能性を持っている。中上級レベルの学習者は、語彙を増やし運用力を高めるといったニーズがあるが、共起関係、格関係、同意語・反意語などの関連語彙を含む語彙リストは、学習者に自ら語彙を「深く」学ぶことを可能にする。発表では、発表者の実践で用いた語彙リストを紹介し、漢字・語彙学習における語彙リストの可能性について考えたい。

22. 母語話者の日本語教授経験が非母語話者の会話処理に及ぼす影響

中西琴子（筑波大学大学院生）

本研究の目的は、日本語母語話者の日本語教授経験の有無が、非母語話者の会話処理に及ぼす影響を明らかにし、そこから日本語教育に関する示唆を得ることである。非母語話者と日本語教授経験者、非母語話者と日本語教授未経験者を 2 人一組とし、各組 10 分間ずつ行われた会話の録音資料を分析した。非母語話者の録音資料をカテゴリーに分類し、出現頻度を換算した結果、対話者が日本語教授経験者のときには会話の主導権が日本語教授経験者にあり、「情報提供」と「相槌」の出現頻度が高いのに対し、対話者が日本語教授未経験者のときには会話が共話型であるため「情報要求」と「意味交渉」が多く行われていることが明らかにされた。以上の知見から、日本語教育において日本語教授未経験者とのインターアクションの機会を日本語学習者に与え、学習者の会話への積極的参加を促すことが必要であるということが示唆された。

23. 初対面会話における日本語母語話者の情報要求発話-同文化内会話と異文化間会話の場合-

大津友美（東京外国語大学）

本研究は、初対面会話における日本語母語話者の情報要求発話に焦点を当て、論じるものである。同文化内状況と異文化間状況のそれぞれで行われた実際の会話をデータとし、情報要求発話を含む局所的連鎖を分析する。本発表では、同文化内会話と比べ、異文化間会話、とりわけ会話相手が中級日本語学習者であった場合と上級日本語学習者であった場合のそれぞれで、日本語母語話者の行動にどのような変化が見られたかについて報告する。第一に、それぞれの会話における母語話者の情報要求発話数を求めることによって、会話相手の日本語能力に応じて、母語話者の情報要求行動がどのように変わるのかを明らかにする。第二に、母語話者からの情報要求に応えた後の、会話相手（母語話者、中級者、上級者）の行動を分析することによって、それがどのように母語話者の情報要求行動に影響し、会話進行スタイル決定に関わるかについて論じる。

24. J-support 向け手引書の試用と改訂に向けての提言-サバイバルコースでの円滑な運用を目指して-

菅野真紀子・串田真知子・田中喜美代・土井美智子・林 智子・藤田紀代子（愛媛大学）

来日直後の留学生への支援として、愛媛大学国際交流センターが実施しているサバイバルコースにおいては、日本語学習支援ボランティア J-support に授業中の会話練習相手などのサポートをしてもらっている。本発表は、より円滑な学習支援のために作成・配布した J-support 向け手引書の使用後アンケート結果などから明らかになった問題点を検討し、改訂に向けての提言を行うものである。

25. 中・上級の成人学習者を対象とした「かるた作り」活動

鶴町佳子（筑波大学）

かるたは子どもの遊びというイメージがあるが、読み札に用いられる文は多くが七五調であり、日本人にとって耳に心地よく記憶に残りやすい形式である。七五調にのせると、その内容は強い印象を残すことができる。日本語学習者にとって、かるた作りを通し七五調に合わせて文を推敲することは、聞き手・読み手に強い印象を残す文を作り出すという意味で、語彙や文型を多く使うのとは別の形で表現力を磨く練習だといえる。本発表では、中・上級の成人学習者を対象に行ったかるた作りの活動について報告する。テーマを「つくばでの留学生活」とし、6名で7〜8字ずつ分担して1組のかるたを作成した。学生のコメントから、学生はこの活動に楽しみながら取り組んでいたこと、日本語への関心が高まったことがわかった。この活動では、学生は表現したい内容を定型のリズムになるよう推敲する中で、日本語らしいリズムや拍感覚に慣れることができ、また、成果物により達成感も得ることができたと考えられる。

26. 映画脚本「クローズド・ノート」分析

山本幸子（共栄大学）

日本語教育の教室では、映画を生身の視聴覚教材として取り入れる試みがよく行われる。良質の映画は、学生の興味を引き、学生の動機を高めてくれる。このことは日本語学習に役立つと考えられる。この研究では、映画脚本「クローズド・ノート」の台詞部分を分析した。まず、映画を対話を含む3つの部分に分類した。次に、対話部分に使われている語彙や表現の数を数えた。その数によって、学生は映画の難易度を知ることが出来る。他の映画においても同様の試みをすれば、もっとよい教材を提供することができるだろう。

【昼食について】

当日は大学会館1階の学生食堂が開いていますので、ご利用ください。また、近隣のレストランマップを当日配布いたします。会場内はお茶コーナーを除き控室も含め「飲食禁止」ですので、お弁当をご持参の場合も学生食堂のスペース等をご利用ください。

【懇親会】

後片付け後、大学会館2階（学生食堂）で懇親会を行います。ぜひご参加ください。会費は2,000円です。

【開催校から研修会のお知らせ】

翌日以降、愛媛大学内において以下の研修会を予定しています。

9月21日（日）9:30～13:00

日本語教育研修会

テーマ：「日本語教師と音声教育」

講師：河野俊之 先生（横浜国立大学准教授）

9月21日（日）14:30～17:00 および9月22日（月）10:00～12:00

アジア人財資金構想事業研修会

テーマ：「ビジネス日本語教育と就職支援（仮題）」

講師：未定

詳細は後日愛媛大学国際交流センターのHPに掲載いたしますので、ご覧ください。

【会場案内】

愛媛大学 総合情報メディアセンターメディアホール
〒790-0855 愛媛県松山市文京町3番

【会場までの交通】

学内工事中のため、駐車場の使用は制限されております。なるべく公共交通機関をご利用の上、ご来校ください。

最寄駅： 伊予鉄道 環状線 赤十字病院前

公共交通機関

以下は最も一般的な方法です。その他のアクセス方法、市内電車・郊外電車の所要時間・時刻表・料金等については、伊予鉄道ホームページ時刻表・運賃・のりつき検索 (<http://www.iyotetsu.co.jp/rosen/>)でご確認ください。

●JR松山駅から

- ・伊予鉄道市内電車

環状線古町方面行き（約10分間隔で運行）に乗り「赤十字病院前」で下車します。

市内電車の所要時間は15分で、料金は150円です。

●松山市駅から

- ・伊予鉄道市内電車

環状線（約10分間隔で運行）に乗り「赤十字病院前」で下車します。

所要時間は22~23分で、料金は150円です。

●空港から

- ・空港リムジンバス

JR松山駅または松山市駅で下車し、そこから市内電車をご利用ください。

JR松山駅までの所要時間と料金は15分で300円、松山市駅までは23分で400円です。

（空港からは路線バスもあり、料金はリムジンバスと同じです。）

●松山観光港から

- ・伊予鉄道郊外電車

松山観光港から高浜駅連絡バスに乗車し、高浜駅で降ります。

高浜駅で横河原線に乗って、古町駅で下車します。

古町駅から伊予鉄道市内電車環状線（大街道方面行）に乗り「赤十字病院前」で下車します。合計料金は650円です。

タクシー

「愛媛大学の城北キャンパスまたは赤十字病院のそばの愛媛大学」とお伝えください。

JR松山駅と松山市駅からは1000円程度、松山空港からは2500円程度、松山観光港からは3000円程度かかります。

【会場の地図】



【会費納入のお願い】

JLEM では1月から12月までを会計年度としております。2008年度会費(3,000円)未納の方は早急にお支払いいただきますようお願いいたします。2年分未納の場合は会員資格を失います。会員資格失効後に再度入会される場合には、未納分の会費も納入していただくことになりますのでご注意ください。会費は、郵便局にて下記の口座に「電信振込」でお振込みいただくか、研究会会場受付にてお支払いください。ご不明な点がありましたら、[#は@です](mailto:jlem#sal.tohoku.ac.jp)までe-mailにてお問い合わせください。

【振込先】 記号：10140 番号：69076511 加入者：日本語教育方法研究会